大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

一休

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-07-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 廣田, 哲通 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011081

一休

廣田哲通

総息云ハ達当ノ後也。修行間無二休息義一。紫野ノ純蔵主ヲ一休云ハ道透過テ一タヒ休也。（『法華経鷲林拾葉鈔』譬喩品「枕」の説明から）

はじめに

一休には三つの顔があるという。一つは清僧一休の像であり『一休和尚年譜』から知りうるもの、今一つは『狂雲集』の一休であり愛欲を肯定し、狂気を演じる一休の像である。そして最後が万人に親しい頓智の一休さんの像である（二〇〇〇年度説話・伝承学会大会（四月二九日、花園大学での西村恵信氏の講演「仏界入り易く魔界入り難し――一休和尚咄に寄せて――」）での講演資料が参考になる）。

一休研究、五山文学研究という視点を遠くに臨みながら一休作と伝えられる『仏鬼軍』についていささかの言及を試みたい。また、本作品についての私の関心は、仏と鬼の戦という本作品のテーマから、私がかつてから関心を持っている相反して対立する価値の不二、一如論、ひいては天台本覚論の視点から成立するし、また具体的作品としては『無明法性合戦状』[注1]、『魔仏一如絵詞』、関連して『ぼろぼろの草子』などを比較の対象として視野に入れている。

さてまた、本稿は私がこのところ関心を持っている、ある一類のお伽草子作品を通して、中世人の知識・教養について明らかにしようとする試みの延長線上にある営みの一つでもある。しかしそれは、すでに視点を示し、いくつかの論文をものした『横座房物語』や『ふくろふ』、『筆結物語』などがもつ性質とは関心も実態も大分様相を異にするようである。

一　『仏鬼軍』の研究史

『仏鬼軍』の研究史といっても多くない。詳細な研究の足跡については本稿のなかで必要に応じてふれるが、『仏鬼軍』が詳細に取り上げられたのは訳注、解題を付した『一休和尚全集』第四巻一休仮名法語集（飯塚大展訳注。春秋社、平成一二年五月）からであるといってよい。また、京都大学附属図書館創立百周年記念公開展示会「お伽草子――物語の玉手箱――」（平成一一年一一月二四日～一二月七日）のための調査、本井牧子氏の口頭発表[注2]、学術論文[注3]がある。そして、平成一三年六月に『京都大学蔵むろまちものがたり2』が刊行された[注4]。影印・翻刻とともに本井氏の解題がつく。これまで前半部欠とされていた本作品がこの調査による京都大学文学部印度哲学研究室蔵本（以下京大印哲本と略称する）の発見によって、該書の本文の素性についてはさておくとしても、本作品のほぼ全貌がこれで明らかになったわけである[注5]。京大印哲本の新出部分は錯簡部分を含むので、したがってそれを除くと実際の新出部分は全体量の約五分の二（三八％）にあたることになる。『仏鬼軍』の前半部はある程度予想されていた通り（『日本古典文学大辞典』の当該項目の藤井隆氏の「巻首の欠部は冥官などが仏法結縁者まで大抵地獄へ落としたという、戦の起りがあったと推定される」など）仏と鬼が戦をすることになった経緯と地獄の様子が描かれている。

やはり、『仏鬼軍』の研究にとって、京大印哲本の発見は本井氏が指摘するように本作品の構造の全体像を過不足なく把握するためにも重要な発見であっただろう。おおよそ予測されていたことではあるが、前半部分の発見によって仏軍の首魁が大日如来であったこと、そしてこの戦の勅定を下したのが大日如来であったことなどが明らかになった。そしてこのことは本作品の思想の大枠が大日如来を中心にした密教の曼陀羅的構造であることをより鮮明にした。そのような中で懸案であったいくつかの問題が如何様であるのかを検討してみたい。

ここで本作品前半部の発見によって全体像が明らかになった『仏鬼軍』の梗概を示しておこう。

極楽の阿弥陀が極楽を地獄に移すことを目論んでその先例を文殊に問う。文殊は先例を挙げこの目論見を是とする。阿弥陀の使いに事情を聞いた大日如来は各将軍を指名して勅定を下す。これを聞いた地獄側も戦いの準備をする（以上十念寺本等では前半欠脱部分）。阿弥陀をはじめ仏・諸菩薩の軍勢が四方から攻め寄せ、激しい戦いが繰り広げら

れなかなか勝負がつかないが、しびれをきらした大日如来が不動明王をはじめとする加勢を指示する。戦は仏軍の勝ちに終わり地獄は浄土と化す。

伝本間の位相、[注6]十念寺本の伝来、[注7]思想的根幹[注8]（五智如来・方角・主尊など）は本井氏の論文・解題が明らかにしていて概ねこれによる。

二　『仏鬼軍』の構図

本作品は全体仏と鬼の戦を述べるものであって全体が比喩として成り立つが、同時にそれは図式化された構造を持っているように見受けられる。その様相を解していってみよう。仏軍の構成はまず冒頭の大日如来の勅定のところに明らかである（京大印哲本の発見によって本作品冒頭部が明らかになってよりはっきりした）。また、ほぼ同様の構図が四方の軍揃えにおいて、また戦に勝って地獄を浄土にするに際しての各大将の領分の指示においても示される。大将・武具・代表的な性状などを簡略に示すと下表のようになる。

また、この作品のテーマは取りも直さずこの戦の発端に述べられる地獄を極楽にするということに他ならない。これに対して地獄の様相は極楽の侵略を伝え聞いて戦闘の準備をするとこ

場面＼配置	大日如来の勅定	軍揃え	地獄を浄土にする
中台			大日心王の都
西方	阿弥陀	阿弥陀仏（妙観察智の幡）	阿弥陀
東方	薬師仏	薬師如来（大円鏡智のたて・仏智薬）	薬師
南方	宝生仏	宝生如来（平等性智のほこ・如意宝珠）	宝生
北方	釈迦仏	釈迦牟尼（成所作智のたて）	尺迦主
	「ヨワカラン所ヲバ、真言宗ノ金剛、胎蔵両界諸尊、不動、降三世」		「四角をば、普賢、文殊、観音、弥勒」

ろと戦闘場面及び戦の終末の浄土化される地獄の描写で描かれるが、その図式は今一つ定かではない。また、物語全体における閻魔の位置が微妙で明らかでない。仏軍の侵略を聞いても閻魔は阿坊羅刹に罪状を確認する立場にある。どちらかというと阿坊羅刹が地獄の（つまり悪の）象徴であるやに受け取れる。意識的に閻魔と阿坊羅刹の間に距離を置いて使い分けているのであろうか。

ここの考察は本井氏の分析をなぞることになるので簡略に整理する。この物語は胎蔵界曼陀羅の中台八葉院にならったものである。五智如来や八葉蓮華の語や思想は『本朝法華験記』巻上九話、『法華経鷲林拾葉鈔』譬喩品三之上「五金色事」、『法華経直談鈔』譬喩品三「四金色之事」などにも見える。

横道にそれるが、本作品冒頭の阿弥陀と文殊のやりとりは、中世特有の言葉、発想、論述の方法が示されていて興味深い。阿弥陀はその目論見の可否を文殊に「先例の有無」というかたちで問う。このあたりを中心に本作品には先例、先蹤、証拠本文の語がよくでてくる。ものごとの正否の判断において先例を重視し、それを証拠とするのは、中世の文学や古注釈における論述の特色として重要視されるところである。またこの問いに対して文殊は「官ノ日記」をみるよう指示する。「日記」に照らすことは本作品にはまんべんなく多く出てくる。(注9) 本作品の物語づくりの方法でもあろうか。また、この冒頭部で阿弥陀はこの行為を「ヒガ事」と認識している。閻魔も後にそれに応じるかたちでこの行為を「ユユシキ僻事」と指弾している。またこの暴挙を阿弥陀は「自由ノ咎」という。この折りの「自由」は中世語で放埒、わがままの意で、その典型的な用例となる。

三　『仏鬼軍』の思想

『仏鬼軍』の根幹の思想は天台および禅の不二論にあると漠然と予想していたが、本作品の基底をなす思想的背景はその他にも地蔵信仰、真言密教など多岐に渡るようである。そのあたりを本文に即して丁寧に腑分けしてみることにしよう。前章で祖述したようにこの作品の登場人物や図柄は密教の曼陀羅図に模したものであって、大日如来を中心とする図式であることは明らかである。それではそこに展開される思想的根幹は如何様であろうか。それは一概に真言密教の思想であると決め付けるわけにはいかないようである。本作品の骨格は発端における先例の追尋と末尾の叙述に明確に示されるように極楽（本作品の地獄の対極の表現は冒頭部では行為者が阿弥陀であるのに応じて極楽となっているが後半からは浄土となっている。本稿でも

それにしたがって呼称する。「天台宗ニハ」（臨川）として引く『金剛錍』の本文の「阿鼻依正全処極聖之自心」の「極聖」（『沙石集』、『ささめごと』も同じ）と「極楽」（『仏鬼軍』）の異同もそう考えると意味深長なものが予想され興味深い）を地獄に移すことである（「炎魔大王ヲ追ヲトシテ極楽ヲ地獄ニ移サン事ハ、先例アリヤイナヤ」（臨川）。同様に地獄の場面で先を承けて「文ヲシテ天台、華厳、真言秘教ノ中ヨリ古ル反古取リ寄セテ証文トシテ、冥途ヲ打取ルベキト其支度アリト聞ユ」（臨川）と出てくる）。そのことの謂は、地獄即浄土という不二論の提示である（この趣旨について天台宗・華厳宗・真言宗の例を挙げて法相宗・三論宗も同様とする）。地獄即浄土という不二論で我々が最も馴染んでいるのは天台の思想であるが、本作品では、多くの引用を踏まえて諸宗にわたり、殊に真言の理智不二の思想が顕著である。地獄即浄土という思想の根源と広がりは如何様であろうか。ここにあげられる文証は諸宗にわたる。また、本作品において発端と末尾における地獄即浄土という思想が示される箇所で、それは諸宗の思想として簡略に仏教概論の体をなして表現される。横道にそれるが、このような叙述の方法は『筆結物語』など中世に知識・教養を披瀝するかたちのお伽草子にみられるところである。そこから抽出できるところこの思想の根源はやはり諸宗に遍満する不二の思想が広く覆っていると考えてよかろう。もうひとつこの点に関わって本作品において地獄がどのような構図でとらえられているかが興味深いところである。本作品のテーマからして地獄は浄土とパラレルなかたちで想定されていて然るべきであると考える。かたや浄土についてはかなり明確にかつシンプルに図式化することが出来る。殊に京大印哲本の発見と、それに関わる本井氏の論文等に明らかなように大日如来を主尊とする密教の曼陀羅世界であるといってよかろう。地獄即浄土の命題は本作品において五智の都は「我等が、むねの」中にあると終結する。これらの発想は八葉蓮華・五智如来・「次於西方観無量寿仏。此是如来方便智」を引く『大日経疏』に見える東西南北の四方の表現など、各所で指摘したようにいろいろなところに見える。また胸の中に八葉蓮華があるという発想もあちこちに見える。延慶本『平家物語』第二本ー二「法皇御灌頂事」、『草案集』「三身釈」など。(注10)

再三横道にそれるが、本作品のあとがきに類する部分の「世の中に（中略）ことの葉の」の文章が『ささめごと』からの転用かとする『一休和尚全集』の飯塚氏の指摘がある。その通りであろう。このことから『ささめごと』を念頭において本作品

を通観すると、先にも引いた「阿鼻依正（中略）下凡之一念」の類似の表現が見える。これは引用部分であり、かつ両書の思想の根幹に関わる部分である。両作品は思想面においてかぶっていると考えることが可能かもしれない。

つぎにもう少し本作品における思想に関わる問題点について考えておこう。極楽が地獄を攻める論拠及びそれに対する阿坊羅刹の反証として念仏者の堕獄にまつわる文言がある。これも思想的に注意しておくべき事柄である。本書の法然批判は歴然である。大日如来が地獄に戦いを挑む大きな理由に阿坊羅刹が念仏者を地獄に堕としているというのがある。これに対して阿坊羅刹は念仏者で悪事をなしていて軽重を秤にかけると罪の方が重い者を堕獄していると論駁する。法然らの念仏思想についての是非の論争を思わせる。先にも発端の先例と末尾の諸宗の理解のところでも経文引用について言及したが、本作品では他の箇所でも全体にわたって経文の引用が散見する。憲法の用例、閻魔の論理にも吟味して一言触れておく必要がある。また、横道にそれるが、本作品中「憲法」の語例が三例見える（臨川三九六頁に二例、飯塚一五九頁）。飯塚氏は注に『易林本節用集』をあげて「公正な処断」と訳しているが、まさに憲法（「法にのっとる」）である（『毛詩抄』、『曽我物語』巻一にも語例が見える）。かつて『法華経鷲林拾葉鈔』の離婆多の説話の中に鬼同士の論争に離婆多が判断を求められて「憲法ノ載断」として公正な判断を下すところで「憲法」の語を見出だして感動したことがあった。また本作品の憲法の用例がいずれも閻魔の言い分に使われているのは皮肉で（いや正しいのかもしれない）興味深い。ここで本作品における閻魔の論理についてふれておく。大日如来が地獄を攻めるときの罪状は念仏者をも地獄に堕としているということであった。閻魔及び阿坊羅刹は、大日如来からの挑戦状に対して自分たちの立場を述べるところ、また戦闘の終結部分でやはり地獄の立場を述べるところの言い分を整理してみる。一言で言えば仏軍の言い分が非理なることを口を極めて説く。それは一応筋が通っているように見える。閻魔にも一理あるということであろうか。

四　幻想の一休

『仏鬼軍』と一休はどう関わるのであろうか。飯塚氏は、前掲解題で十念寺十八世沢了の元禄十年版梓行の際「初めて『仏鬼軍』と一休が結びついたのではないかと推定する」という。あたっているかも知れない。少なくとも『仏鬼軍』の内容に一休の面影は見えないし、禅語もまったく指摘できない。一休作

であるという伝承以外での作品の内容や表現に一休の痕跡は見出だせないと断定してよかろう。『仏鬼軍』において一休との関係はやはり幻想のままで置くほかないのかも知れない。

むすび

文学というのは、そして比喩というのは空手、空拳の絵空事であるから、そこに描かれた絵柄の真実味だけがその作品の価値になる。『仏鬼軍』の構図（図柄）と思想の観点から想到してみた。

この一年間（平成一三年度）、いろいろなかたちで曼陀羅にふれる機会がしばしばあった。『仏鬼軍』を丁寧に読んだことが私の曼陀羅への関心のとば口になるかも知れないという予感がする。

［注］

（1）牧野和夫『中世の説話と学問』（和泉書院、一九九一年一一月）。本書Ⅳ四、五、六節で氏はこの書がアレゴリー文学の稀有の存在であることを指摘する。『無明法性合戦状』では無明の悪王が真如の法王の城から衆生を奪い取ったことが合戦の発端になっているが、地獄方は自分の正当性を主張するなど両者相似ている。

（2）「室町時代物語『仏鬼軍』について―新出本の紹介を中心に―」（関西軍記物語研究会　第三十八回例会　二〇〇〇年四月十六日　神戸松蔭女子学院大学）

（3）「室町時代物語『仏鬼軍』について―新出本の紹介を兼ねて―」（『京都大学国文学論叢』第五号、平成一二年一一月）

（4）臨川書店、平成一三年六月。

（5）京大印哲本は「昔シ恋シ床シト歎キ悲ミシ七世四恩タヅネトリテ、極楽ノ友タヨリニ仕ランドゾハヤリケル」で始まって、そのあと「弥陀大将軍ノ仰」につながって、意味が不明であり、ごくわずかと思われるが、なお欠落が想定される。

（6）伝本間にほとんど大きな差異は見られない。

（7）十念寺本がおおもとで従来の伝本はすべてそこから伝写されたものと考えられる。

（8）胎蔵界曼陀羅の中台八葉院にならったものである。

（9）「日記をひかへす、はかりことなくして合戦を、はしむれは、勝事百に一もなし、しかあれは、薬師経の日記にまかせ、真言儀軌を守て、寄べき也」（大成五四七頁）、

「小乗経等ノ日記ニ任セテコシラヘタリ」（臨川三九七頁）

(10) 吉原浩人「院政期における〈本覚讃〉の受容をめぐって――『心性罪福因縁集』と大江匡房の文業を中心に――」（菅原信海編『神仏習合思想の展開』汲古書院、一九九六年一月）

［付記］

○本稿における『仏鬼軍』の引用本文等は『室町時代物語大成11』（横山重、松本隆信編、昭和五八年二月）を主とし、必要に応じて『一休和尚全集第四巻』、『京都大学蔵むろまちものがたり2』に拠った。